

研究報告

“無能の人”と社会的自己滅却願望
——つげ義春の「蒸発」を読む

藤 田 秀 樹

富山大学人文科学研究第 80 号抜刷

2024年2月

“無能の人”と社会的自己滅却願望 ——つげ義春の「蒸発」を読む

藤 田 秀 樹

はじめに

つげ義春の「蒸発」(1986)は、季刊漫画誌『COMIC ぱく』(日本文芸社)に連載された6作から成る“無能の人”シリーズの掉尾を飾る作品である。ここで言う“蒸発”とは液体の気化のことではなく、人が突然行方をくらますの意である。日本では高度経済成長の只中の1960年代半ば頃から、人が予告もなしにある日突然行方をくらまし、家族、職場、地域社会、交友関係といった社会生活の場、社会関係のネットワークから離脱し、それ以降、近親者や関係者との連絡を一切断つという現象が見られるようになった。別の言い方をすれば、“世捨て”、または“社会からのドロップアウト”である。1967年に公開された今村昌平監督の映画『人間蒸発』は、この現象に対する社会の関心の高まりを反映したものであろう。

実は、つげが蒸発というモチーフを取り上げるのはこの「蒸発」が最初ではない。1960年代の漫画の新しい波を牽引した月刊漫画誌『ガロ』につげが精力的に発表した作品群、特に1967年から1970年にかけての作品群の中には、“蒸発”という語句こそ使っていないものの、これをモチーフにしていると思われるものが散見される。例えば「峠の犬」(1967)がそうであろう。行商人の「私」が語る「五郎」という名の無愛想な野良犬についての物語だが、「私」が何かと世話をしていた五郎はある日突然姿を消す。翌年、「私」は行商では普段利用しない道を辿り、合掌峠という所までやって来て、その茶店で五郎と再会する。茶店の主人によれば、五郎はここでは別の名前と呼ばれており、一昨年に突然行方をくらまし、1年間どこかをうろついて戻ってきたのである。つまり五郎は、“蒸発”をして「私」の里へやって来て1年間暮らしていたのだ。どこにいてもそこに根付くことはなく、どんな名で呼ばれても頓着することなく、風来坊のような生き方をしているのである。さらに合掌峠という地名は、なぜか仏門を捨てて乞食になった昔の西国の高僧がここで合掌したまま息絶えたことに因むものであり、巧みな2つのコマの組み合わせにより、この僧と五郎が重なり合う。まるで五郎がこの“世捨て人”の僧の化身であるかのような印象を与える。

「ゲンセンカン主人」(1968)という作品も興味深い。ひとりの中年男が「死んだように静かな寂れた温泉場をふらりと訪れ、宿泊した宿の身内のいない女将と強引に性的な関係を持ち、その後その宿の主人におさまる。似たようなタイトルの「やなぎ屋主人」(1970)においても、鬱々とした精神状態にあることを窺わせる主人公の男が、訪れていたヌードスタジオを突然飛び出

し、衝動的に新宿から房総行き列車に飛び乗り、「N浦という淋しい駅」で降りて「やなぎ屋」という大衆食堂に泊めてもらう。深夜、彼は「ときどきもの欲しそうな目つきでぼくを盗み見」たその店の娘と性的な関係を持ち、そのあと彼女に、「いいじゃないか 結婚すれば。おれはやなぎ屋の主人におさまって毎日料理でも作ってあげよう」と言う。やがてその性行為とその後の言動は現実には起こったことではなく主人公の妄想であるらしいことが分かるが、そうだとするとこの2つの作品の男たちの（願望されたものを含む）行動様式や思考様式は蒸発者のそれであろう。

これらの作品は蒸発という現象が世の耳目を惹いた時代に発表されたものだが、つげは単にタイムリーなトピックに乗じたわけではないように思える。つげには、世捨て、零落、落魄といったものに密かに心惹かれる性向があるようだ。彼は「ボロ宿考」というエッセイの中で、「貧しげな宿屋を見ると私はむやみに泊まりたくなる」のであり、「侘しい部屋でセンベイ蒲団に細々とくまっていると、自分がいかに零落して、世の中から見捨てられたような心持ちになり、なんともいえぬ安らぎを覚える」と書いている(130)。また別のエッセイでも、「山奥でひっそり独居することをこの数年来夢想していて、近ごろ旅に出ると隠棲するにふさわしい場所探しもついでにそれとなくしてみたりしている」の述べている（「秋山村逃亡行」169）。そう言えばつげはよく旅に出るが、行き先にはぎやかな観光地などではなく、寂れて侘しげな、または貧しげな土地ばかりだ。そしてそのような場所が彼の旅漫画の舞台となる。旅は彼にとって、世捨てと隠棲の疑似体験のようなものにも見える。さらにつげは、実生活においても自ら“蒸発”を行っている。1968(昭和43)年の初秋に、親しい編集者に「マンガをやめたい」と漏らし(権藤 19)、水木しげるのもとでのアシスタントの仕事も放りだして、言わばこれまでの漫画家としてのキャリアを投げ捨てるようにして、住みつくつもりで東京から九州へ遁走したのである（「住みつくつもり」といいながら、九州を歩き先として選んだこともその地で過ごした日々も極めて無計画で行き当たりばつたりのものであった）。また少年時代には2度にわたって密航を企てている。正津勉が述べているように、蒸発は「つげの積年の憧憬という、よりもさらに、もっと生来の宿望」なのかもしれない(110)。

さて「蒸発」という作品であるが、“無能の人”連作——「石を売る」(1985)、「無能の人」(1985)、「鳥師」(1985)、「探石行」(1986)、「カメラを売る」(1986)、「蒸発」——の先行する5つの作品とは異なる肌合いを持つものだ。まず“無能の人”である助川助三が物語の後景に退いてしまっている¹⁾。「石を売る」において妻から、「マンガだって芸術などおだてられて調子に乗るから、けっきょく注文もこなくなった」と腐される売れない漫画家であり、カメラや古物のマニアで、妻と幼い息子と3人で団地で暮らしているなど、作者自身の姿が多分に投影されたこの人物は、「蒸発」以外の作品では物語展開の機軸となって、その“無能さ”ゆえの悲喜劇的な失態や挫折を演じている。しかるに「蒸発」においては、「無能の人」と「探石行」でわずか

5~6コマにのみ登場するだけのマイナー・キャラクターである古書店主、山井と、幕末から明治にかけて実在した俳人、井上井月^{せいげつ}(1822—1887)が前景化され、助川は傍観者の・観察者のな語り手の位置に佇んでいる。さらに「蒸発」は、これと言った出来事や事件が不在の作品である。前半は助川が語る山井の人物像と、この二人が交わす“無能の人”問答や“蒸発”問答で構成され、後半では、山井が貸してくれた『漂泊俳人 井月全集』という1930年に出版された古書を、いくつかの句を紹介しつつなぞりながらの助川の語りを言わばヴォイスオーバー・ナレーションとして、信州の伊那谷に忽然と姿を現してから野垂れ死に同然の死を迎えるまでの井月の後半生が略伝のような形で再現されていく。

一般にはほとんど無名に近いとはいえ実在した歴史上の人物の生涯を、その人物に関する文献に基づき点描したものが作品の半分以上を占める「蒸発」は、つげが掲載号の後書きで「資料負けでした」（「資料負け」）と告白しているように、資料に寄り掛かり過ぎで虚構性や創作性が希薄とも言える。さらにその後書きで、つげは興味深いことを述べている。「今回は“蒸発論”を具体的に説明するつもりでしたが、その肝心な部分を省略したので不明瞭な出来になってしまいました。その部分をいま書いてしまうと、この連作の結末が見えてしまい、先を急ぐと連作全体の説得力に欠けるおそれもあるので用心したのです」（「資料負け」）。つまり、「蒸発」は“蒸発論”を———そういえばこの作品には、「いながらにしていない」とか「あってない」といった禅の公案のような抽象的、観念的な文句も出てくる——「説明する」ものとして構想されたのであり、結果的に「その肝心な部分を省略した」が、もしそうでなければ“無能の人”連作を統括するような作品になったというのである。“無能の人”という主題的文脈の中で、“蒸発”というモチーフはどのような意味や位置づけを持つものなのだろうか。これらのような問いを念頭に置きつつ、つげ義春の「蒸発」という作品を読み解くことを試みる。

1. 山井というもう一人の“無能の人”と“蒸発”というモチーフ

「山井書店の奴はいつも寝てばかりいる変りものだ」という吹き出しに囲われない台詞と、「山井書店 古書」という看板をその前に置いた部屋で、無造作に積み重ねられた本に囲まれて男が布団の中で寝ている画で構成されているコマとともに、「蒸発」は始まる。2コマ目と3コマ目も、よりそばに寄った視点で寝ている山井を側面から捉えた画で、それぞれに「まったくやる気を見せずユウツそうにしているから 客も寄りつかない」、「それでもどうにか生活しているから不思議だ」という、やはり吹き出しの無い台詞が添えられている。山井の目は黒塗りで、まるで生ける屍のようである。2ページ目を構成する4つのコマでは、布団からは出ているものの、寝巻姿のまま杖をつきながら外を歩いているのだが、吹き出し抜きで、「この間珍しく散歩なんかしていたけど」、「グズグズヒョロヒョロ まるで年寄りか病人のような真似して」と記されている。実際、このページの3つ目のコマでは山井は道端にしゃがみこみ、

最後のコマでは体を支えるように板塀に片手をついている。

このように、「無能の人」——ここでも登場する5コマ中4コマで布団の中で寝ている——と「探石行」では取るに足らない存在だった山井が、「蒸発」ではまるで「いつも寝てばかりいる」ことを自らのアイデンティティにしているような人物として、冒頭の2ページを独占して登場する。彼が寝てばかりいるのは、病気を患っているからではない。2ページ目の最後のコマには、「奴の妻君の話じゃ病気ひとつしたことないというのに」とある。かといって単に睡眠をとっているわけでもない——「無能の人」では布団の中に入ったまま助川と会話を交わしている。それは起きて活動することの拒否であり、意志的な無為、無気力、怠惰である。そういえば、“無能の人”の助川もよく「寝て」いる。「石を売る」の冒頭のコマでは、河原に設えた仮庵のような石屋の“店舗”の中で寝そべっている。「無能の人」の扉絵には、よだれを垂らしだらしなく腹を露出させたステテコ姿でうたた寝をする助川が描かれている。「探石行」では、妻子を連れて桂川の上流へ探石に出かけるが、目的にかなう場所が見つからず、妻と一緒に河原でふて寝する。

山井の「古書店」なるものの体裁も、彼のやる気の無さや無気力を映し出すものだ。それらしく店を構えるのではなく、自宅の普通の部屋を店舗として使っているのであり、しかもそこに布団を敷いて店主がいつも寝ているだけでなく、書籍もただぞんざいに積み重ねられているだけなのだ²⁾。本気で本を売る気があるのか疑わしいような“店構え”である。

このように見てくると、助川と同様に山井も紛う方なき“無能の人”である。ただ、助川と違って、自分の日頃の振舞いについて、「こうして自分なりに工夫しているわけですよ」と言っているように、意志的、確信犯的に“無能の人”を“実践”している風が漂う。「いつも寝てばかりいる」ことと、「グズグズヒョロヒョロ」とした「年寄か病人のような真似」をすることは、勤労や生産性に対する不適格性を、およそ商売気が感じられない店構えは、営利や採算性など頭がないことを、それぞれアピールするものであろう。これに対して助川は、自らが“無能の人”だという自覚はあるものの、その事実から目を逸らそうとするきらいがある。利得や成功を求める俗気もあり、一縷の望みを抱いてドン・キホーテ的に無謀で無駄な企てや試みをしては滑稽な、または哀愁をそそる失態や挫折を繰り返す。彼は物語が発生しやすいキャラクターと言えるかもしれない。

3ページ目から5ページ目にかけて助川と山井の間で交わされる“無能の人”問答は、この二人の“無能の人”の自意識の相違を浮き彫りにする。自らも“無能の人”であるにもかかわらず、助川は寝てばかりいるといった山井の日頃の行状について、問い詰めるような調子で「どうゆう見なんです」と質す。これ以前の山井についての吹き出しの無い記述は助川の語りであり、映画におけるヴォイスオーバー・ナレーションのようなものであろう。助川の問いに対して山井は、「あんたに感化されたんでしょな。あんただっていつも寝てばかりいるじゃ

ありませんか」と応じる。次のコマは河原の粗末な石屋の店舗で寝そべっている助川の画で、「そりゃまあ たいして忙しい商売じゃないですからな」という彼の言葉が吹き出し抜きで記されている。続く2つのコマも助川の店の点描で、やはり吹き出し抜きで「その商売がだいたいにおいて まともとは思えないのですよ」、「その辺で拾った石を売るなんて」という山井の言葉が添えられる。辛辣な言葉を浴びせられて助川は山井をにらみつけるが、山井は動ずる色もなく畳み掛ける。「売れるわけがないのを承知の上でしょう。売れないということは結果的に何もしていない。つまり寝ているのと同じようなものじゃありませんか」。続いて次のような強烈な言葉を浴びせる。「ようするにあんたはなんの役にも立っていない。存在価値がない」。助川はむきになって反論する。「ひどいことを言うね。結果はどうあれ オレは一所懸命やっている。努力しているんだ」。

「ようするにあんたはなんの役にも立っていない。存在価値がない」という言葉が助川に浴びせられるコマは興味深い。画はこのかなり辛辣な言葉にショックを受けて額に汗を滲ませる助川の上半身を正面から見たものだが、コマには姿が描かれていない山井のこれらの言葉が吹き出し抜きで地の部分に、しかもその2つの文がそれぞれコマ上部の右端と左端に助川の頭部を挟むように記されている。ここまでも、問答の現場以外の風景を描いたいくつかのコマにおいては、二人の言葉は吹き出し無しで記され、読者は文脈と台詞の内容でどちらから発せられたものかを判断することになる。しかるにこのコマでは問答の一方の当事者がちゃんと描かれており、例えば山井の言葉をしっぽを枠外に向けた吹き出しの中に記すというやり方もあったはずだ。実際、「探石行」における田舎宿での家族3人の入浴の場面では、コマに描かれている助川に向けられた、コマの外にいる妻の言葉がそのような形で記されている。しかし問題のコマでは、吹き出しに囲われていないために山井の言葉は彼の他の台詞と比べて重々しく、決定的な宣告といった印象を与えるものになっている。

他方でこのコマでは、正面から見た助川のクローズアップと吹き出し抜きの台詞という組み合わせのため、山井の台詞がまるで助川の内的独白、つまり内なる声であるかのようにも見える。とすれば、助川にとって山井とはどのような存在かが、両者の関係性が問題となる。清水正は山井を、「〈寡黙〉であることを作者に要請されている」助川の内部を代弁する「助川の分身といってもいい存在」と捉えている(291)。つげの作品に登場する作者自身をモデルにしたものと思われる人物たちの中では、助川はかなり冗舌なタイプであるが、確かに自らの“無能の人”性に関しては「寡黙」である。「探石行」においても、宿で入浴中に妻との会話で虚無僧が話題になると、助川は、「まあ一種の無用者だな。高度資本主義社会に機能しない無用の存在ってわけだ」などと滔々と語る。「役立たずの無能の人なのね」という妻の言葉に助川は笑いながら、「ははは そうゆうことだな」と応じるが、「あんたみたいじゃない!」と言われると、青ざめ震え出し、居たたまれないといった様子で顔半分を湯の中に沈める。山井は、助

川が「結果はどうあれ オレは一所懸命やっている。努力しているんだ」と自己弁護しつつあえて目を向けようとしない“不都合な真実”を容赦なく彼に突き付ける“もうひとつの自己”なのかもしれない。

またこの二人は、道化とそのもうひとつの自己または分身の組み合わせである「道化のペア (the fool pair)」を思わせる。助川、山井、そして井月はいずれも道化的な相貌を備えている。道化は「日常生活における極度の無能力」によって「効用性と社会秩序という義務系から解放される」のであり(山口 11)、「他の人々にとって物事の秩序と思えるものに合わせて知覚し、理解し、行動する能力を欠いていて」、「その言動は不完全な状態、または逸脱を示すものようである」のだが(Willeford 26)、これらの特性はまさに3人に当てはまる。山井が過剰なまでに“無能の人”を演じる様は演劇的とも言える。また後述することになるが、井月は道化の一側面である「伴食者」や「聖なる愚者」などの貌も持つ。そしてウィリアム・ウィルフォード(William Willeford)によれば、数多くの喜劇的演芸のジャンルでお馴染みのものだが、道化とその分身の相互作用を表すのに、道化のペアという仕掛けが用いられる(38)。助川と山井の“無能の人”問答は、この道化のペアの掛け合いのように見える。「石を売る」において妻から「ぐうたら能なし」と言われ、河原で拾っただけの石を商品として売ろうとすることははじめとして、他人から見ればまともとは思えないことを真剣にやって苦汁を嘗め続ける助川は紛う方なき“無能の人”であり、その日常生活における無能力や社会秩序への適応性の欠如により道化的である(鼻の下にちよび髭を蓄えたこの男は、少しチャップリンに似ているかもしれない)。しかるに彼は、まるで自分が非・“無能の人”、非・道化の側にいるかのごとく、どういう見なのかと山井を問い質す。すると山井は、思いがけず冷笑的な貌を覗かせた鏡に映る鏡像のように、あんたもこちら側の人間だ、と言い放つのである。

そして5ページ目で山井は、自らの“無能の人”性について語り出す。

こうしているとまるで病人か年寄りとか 女房にあいそうつかされたふぬけとか 窓際族 失業者とかようするに役立たずの零落者のように思われ 誰も相手にしてくれません。誰からも期待も依存もされません。役立たずとして社会から捨てられます。捨てられた私は存在しないも同然です。「いながらにしていない」ということです。

山井が自分を、「役立たずとして社会から捨てられ」、社会における確固たる役割や居場所を失って「存在しないも同然」、つまり「いながらにしていない」という状態にあると形容することは、“蒸発”というモチーフの導入の端緒となる。もう少し後の部分で山井は、蒸発とは「自分を『あってない』と観想するための具体的方法」とであると語る。あとで詳述することになるが、山井にとって蒸発とは、「存在しながら同時に存在していない」という撞着語法的な様態なのだ。

6ページ目から9ページ目にかけて、再び助川のヴォイスオーバー・ナレーションとともに、山井が今暮らしている町に住みつくようになったいきさつと、その後の片隅でひっそり生きるような彼の日常が描かれる。井月が後半生を過ごした土地でもある伊那の高遠出身らしい山井は、休業状態にあったこの町の唯一の古本屋の未亡人と「できて」しまい、その店の主^{あるじ}におさまった。その際、「死んだ亭主の名前が山井一郎で 奴は表札に横棒一本足して山井二郎になった」。つまり「山井」というのは偽名なのだろう。人間の最も基本的なアイデンティティである名前に対するこのいい加減さや軽さは、山井という人物像を如実に物語るものだ。新たな土地にやって来ると、あっさりとは別の名前を身に纏う。自己同一性などというものには全く頓着しないのである。そして、細君を大いに失望させた「ひどい怠けもの」ではあるが、「ママ見いじめするでなし 性質は温順 怒ったのをみたことない」に加えて、「自分を居候のような立場と心得てか 食事にしても みんなの済むのをテレビを見ながらじっと待って 食べ残しを食べる」といった有様である。彼は助川と違って俗気とは無縁で、無欲で恬淡としており、片隅や周縁に身を置こうとする性向があるようだ。

そして山井は時々、「どうせ私はいずれ帰るのだから……。ほんのちょっとこっちに来ていただけですから」といった妙なことを口走る。そのため、郷里の伊那にも所帯があるのではないかと噂される。10ページ目の冒頭のコマで、助川は山井に、「おたくひょっとしてこっちに蒸発して来たんじゃないの」という問いを投げ掛ける。ここで初めて、蒸発という語句が提示される。この問いに対して山井は肯定も否定もせず、蒸発は「よくある話」で、具体例として鴨長明の『発心集』や西行の偽作と伝えられる『撰集抄』といった蒸発譚を挙げる。そして既述のように蒸発を、自分を「あってない」と観想するための具体的方法、と表現する。山井は自分が蒸発して来たかどうかは明らかにしないものの、蒸発というものについての彼の一連の言葉は、それが彼にとっての大きな関心事、思案の対象であり続けてきたことを物語るものだろう。

蒸発をめぐる問いは助川にも向けられる。山井は助川に言う。「あんたの韜晦無能ぶりも似てますな。自分を役立たず無用の者として社会から捨てる。蒸発しているようなものじゃありませんか」。山井が蒸発を形容する「いながらにしていない」、「あってない」というパラドクシカルな言い回しは、生命体として、生理的身体としては存在している、つまり「いる」、「在る」が、社会的には存在しないも同然、「いない」、「無い」ということなのではあるまいか。社会にとって無能・無用な存在となることで、捨てられるという形で社会から離脱する。言わば、社会的存在としての自己を減却するのである。そして助川のように、いわゆる蒸発を実行しなくても、自分を「存在価値がない」、「役立たず無用の者として社会から捨て」れば「蒸発しているようなもの」なのだ。蒸発とは、無能の人のひとつの存在の様態というよりむしろ、無能の人が行き着く“果て”であるようだ。「蒸発」が“無能の人”連作の掉尾を飾る作品となった所以は

ここにあるのではなからうか。

「蒸発」は扉絵を除いて37ページから成り、そのうち1ページ目から13ページ目まで、つまり全体の3分の1強が助川と山井が占めるセクションである。これ以降、山井は助川の脳裏に浮かぶその姿が描かれる1コマを除いて作中に登場することはない。このセクションでは、先行作品においてマイナー・キャラクターに過ぎなかった山井が意志的、確信犯的な“無能の人”として立ち現れ、また“無能の人”と絡めて“蒸発”というモチーフが提示される。ところでこのセクションの最後の部分で、山井は意味深長な言葉を口にする。「まあ私はほんの一時的にこっちに この世に来ているだけですから・・・」。「この世」が「現世」なのか「俗世（間）」なのかは判然としないが、もし「現世」の意なら、この作品で取り上げられる“蒸発”は死をも視野に入れたものになる。このことについてはあとで触れることになる。

2. “無能の人” 助川が辿る “蒸発者” 井月の後半生

「蒸発」は14ページ目から新たな展開を見せる。いよいよ井月が登場してくることになるが、14ページ目から16ページ目までは登場前のプロローグのような部分になっている。助川は河原にある石屋の店舗で、山井が貸してくれた下島勲・高津才次郎篇の『漂泊俳人 井月全集』(1930)という古書を読み始める。山井は“無能の人”シリーズで登場する3作全てにおいて、助川をある行動へと誘うという役割を演じる。「無能の人」では彼が紹介した一冊の本が、助川をマニャックな石の収集へと駆り立てるきっかけとなる。「探石行」では助川の原画を3万円で引き取りたいともちかけ、その金で助川一家は探石行に出かける。そしてこの「蒸発」でも、古書を貸し与えることで助川を井月に引き合わせる。山井は助川にとって「動機付け」のキャラクターなのである。

17ページ目から、吹き出しの無い助川の語りとともに、伊那谷に忽然と姿を現してから行き倒れのような最期を遂げるまでの井月の後半生が点描される。それは物語の終わりの1ページ手前の36ページ目まで20ページに渡って続く。途中3度、河原にいる助川の姿が挿入されるが、それらはいずれも3コマ程度のものだ。37ページから成る作品の半分以上を実在した歴史上の人物の伝記が占めるというのは、つげ作品としては異例である。井月という俳人がこのように特別扱いされるのは、彼が“蒸発者”だからであろう。井月が登場する最初のコマは、深編笠をかぶり、小さな竹行李を背に負い、腰に木刀をさした人物の後ろ姿と彼の眼前に連なる山々を描いた画と、「安政五年 井月三十六、七才（推定） 忽然と伊那谷に現われた」という語りで構成される。漂泊する井月を描いたコマが4つ続き、「何処からやって来たのか素性来歴一切不明」、「越後長岡藩土との説もあるが推測の域を出ない」といった語りが記される。井月の後半生を辿るにあたって、つげは前出の『井月全集』に参考篇として収められた編者の下島勲による「略伝」や下島と高津才次郎による「奇行逸話」などを参考資料としたものと思

われるが、伊那出身の医師で少年時代に実際に井月その人の様子や振舞いを見聞きしていた下島は、井月の郷里からの出奔を「家出」と表現し、それは30歳前のことのように、その後諸国を漂泊・行脚し伊那へやって来たと思われる、と述べている(260-261)³⁾。もし井月がかつて長岡藩士だったとすれば、身分も家禄も捨てて武士社会から完全にドロップアウトするという“蒸発”だったことになる。

蒸発者であることに加えて、井月は、伊那谷という狭い地域においてはあるものの一所不住の浮浪生活を送り、寄食によって命をつなぎ、晩年は乞食同然の風体になった“無能の人”でもあった。井月の伊那谷での後半生は、当初は詩才豊かな文化人として歓待されるが、やがて厄介者として疎まれ忌避されるようになるという落差によって特徴づけられる。「蒸発」の24ページ目からは、井月の零落の過程が綴られていく。このページの最初のコマでは、徳利の転がる床の上に突っ伏すような姿勢で、しかも衣服の尻の部分に脱糞による染みを滲ませて眠り込む井月の画に、「だが無類の酒好きで 強酒ではなかったがすぐ泥酔し 下痢 寝小便をもらすこともあった」という語りが添えられる。元来、人から疎まれやすい性癖の持ち主だったようだ。3つ目のコマでは、みすぼらしい格好をして、しかも蠅にたかられているが、それを恥じる様子もなく泰然とした表情を浮かべている井月の画とともに、「そのうちにシラミはたかりヒゼンを病み 次第にうとまれ もてあまされるようになった」とある。その後、犬に追われ、悪童からは罵声と磔を浴びせられる井月が描かれる。石のひとつが頭部に命中し血が流れるが、未亡人の子供から玩具の刀で頭を叩かれても平然としている山井と同様に、怒りを見せたりはしないのである。そして下島が「晩年の井月は乞食も乞食、余程極端な状態であつたらしい」(263)と書いているように、やがて井月は乞食としか思えないような風体になる。

ところで、俳人であると同時に乞食であること、つまり漂泊しながら俳句という詩歌を届け寄食に与るといふ井月の伊那谷での世過ぎは、人の戸口に立って祝福する言葉である^{ほかいごと}寿言を唱えて食べ物ももらって歩いた^{ほかいびと}乞児を想起させる。残念ながら私は未だに観る機会に恵まれていないが、北村皆雄監督の映画『ほかいびと 伊那の井月』(2011)はそのタイトルから察するに、このような連想のもとに井月を描いたものようだ。折口信夫によれば、かつて乞食者とは浮浪祝言師であった(93)。山折哲雄も、「本来、乞食は『マロウト』であり『マレビト』」であり、「神の祝言を運ぶ芸能者」であった、と述べている(113-114)。井月も外部から訪れた「マロウト」、^{ことほ}「マレビト」であり、彼が詠む俳句は伊那谷の風土を^{ことほ}祝言だったのではあるまいか。また赤坂憲雄によれば、まれびと／異人は「共同体によって疎外・排除されると同時に、神霊(まろうど神)を背負いつつ訪れきたる者として歓待される」両義的な存在だが(86)、伊那谷という共同体において歓待されながらもやがて疎まれ忌避されるようになる井月も、このまれびと／異人の相貌を帯びている。さらに、“表現者”でもある“無能の人”という点で、井月は“売れない漫画家”である助川／つげにとって大いに感情移入しやすい人物なのかもしれない。表

現者ゆえの処世に関する無能力と無頓着は、この3人の共通項である。

また既述のように、日常生活における極度の無能力や世間的な尺度に合わせて理解したり行動したりする能力の欠如ゆえに、助川や山井と同様に井月は道化的な相貌を帯びる。23ページ目の冒頭のコマでは、風呂敷包みを背負って通りを行く井月の画に、「俳諧趣味のある家を泊り歩き」と記されているが、俳句の才を披露して寄食に与ることは、道化の原型である古代社会の“伴食者”(parasite)を思わせる。古代ギリシア社会には、招待されてもいないのに食事時に富者の家に押し掛ける伴食者と呼ばれる者たちがおり、彼らの中には物真似や当意即妙の応答の才によって食事の場で歓迎される者もいた(Welsford 3-4)。井月も、俳句という言葉の“芸”によって名望家や旧家や知識階級の家で歓待され酒食のもてなしを受けたのである。

他方で井月は、“愚”と“超俗”が同居するような人物だった。「奇行逸話」の冒頭において、下島と高津は井月の人となりを一見^{しゅんく}蠢愚に近い超凡と形容している(269)。「蠢愚」とは「極めて無知で愚かなこと」という意味である。「略伝」でも下島は井月について、「酒精中毒の故」もあったかもしれないが「口をきいても低音で、^{しか}而も舌がもつれて何を言うのか明瞭に分かったことが少なかった」(264)と述べる一方で、井月の日常生活を「人間普通の生活から離れることの遠い、実に破格な純真無垢の生活相」と表現し、それと匹敵するかもしれない生活相を持った古今の人物としてアシジの聖フランシスや良寛などを挙げている(265-266)。「蒸発」でも井月は、「随所で昼寝もすれば野宿もした」り、泥酔して大小便をもらしたりする一方で、悪童の悪さに怒りを見せることもなく、「天地のひっくり返る明治維新 文明開化もどこ吹く風」で、人からももらった綿入れの羽織を「乞食が寒そうにふるえていたので」与えてしまい、自身は寒風に吹かれ薄着で震えている。人の目には“愚”とも映るような井月の無欲・無私・恬淡・超俗には、どこか行者や聖人の気配すら漂う。

俳句を詠みながら乞食同然の格好と世過ぎで漂泊する井月は、ロシアの伝統的な“聖なる愚者(道化)”(holy fool)である“ユロージヴィ”(yurodivyi)を思わせる。ユロージヴィは^{ふうてん}瘋癲行者とか^{ぎょうじや}伴狂者と^{ようきやうしや}訳され、瘋癲、つまり狂人や痴愚のような振舞いを自らに課したキリスト教の行者である(中村 240-241)。彼らは、「ぼろをまとい、鎖の足枷をつけるなどしてわが身をいためつけ、物乞いをしながら世を渡り、予言や奇跡をおこなっていた」(山折 51)。井月も乞食のような風体で、狭い地域をではあるが一所不住で遊行して歩いた。また彼が行ったのは予言ではなく詩作だが、中世のイスラム世界や北欧などにおいて予言と詩作はどちらも靈感によってもたらされた言葉を発するという営為であり、それゆえに重なり合うものとみなされ、さらにしばしばこれらを職掌として担ったのが宮廷道化であった(Welsford 79-82; 84-87)。こうしてみると、井月も特別な意味や力を付与された言葉を駆使しながら世を渡る超俗の聖なる愚者(道化)と言えるかもしれない。また16世紀末期にモスクワを訪れたイギリス人、ジャイルズ・フレッチャーは、当時のロシアの政治・経済から民衆の風俗習慣にまで書き及んだ自

著でユロージヴィにも触れ、彼らは国家や政府や権力者に対する批判・告発者でもあったと述べているが (qtd. in 中村 252)、井月も意識的なものではないだろうが、同時代の支配的な価値や規範の批判者たり得ていたのではあるまいか。つまり、彼の「家出」は家や禄を存続させるという江戸時代の武士のレーゾン・デートルに対して、また維新後も乞食同然の浮浪生活を送っていたことは明治時代になって頭をもたげ始めた合理や殖産といった価値に対して、図らずも批判や異議申し立てをするものとなったのではなかろうか。

井月の後半生を辿る物語は彼の死とともに終わる。「明治19年師走 井月は枯田の中に糞まみれとなって」行き倒れになっているのを発見され、死んでいると思われたが、「まだかすかに息が残っていた」。あちこちをたらい回しされたあげく、翌明治20年3月10日に死去した。「蒸発」の35ページ目と36ページ目に描かれる井月の最期は以下のようなものである。彼を看取る俳友たちに辞世の句を所望され、井月は差し出された紙に「何処^{どこ}やらに鶴^{たづ}の声聞く霞かな」という句を震える手で書き始める。作中でも言及されているが、実はこの句は旧作で、臨終の折にこれを辞世として書いたという (復本 21)。35ページ目は4つのコマから成り、最初の2つは井月の持つ筆が紙に句を書き付けていく画で、「何処やらに鶴の声聞く」の部分まで記される。3つ目のコマでは、一面に濃い霞が立ちこめ、その光景の中央に黒い人影が見え、吹き出し抜きで「かすみ」という語句が記される。4つ目のコマも同じ構成だが、人影と「かすみ」は小さくなっている。濃い霞の中、彼方へと立ち去ろうとする人影は、他界へ出立する井月であろう。

つげ作品において濃い霞や霧は、現世から他界へと至る回路として用いられるようにも思える。「枯野の宿」(1974)という作品においても、遠出中に突然の夕立に会ってずぶ濡れになり、中洲のような所にある宿屋に飛び込んだ主人公は、そこで高熱を出して寝込む。やがて彼は、「これからいい所へ行きましょう」と語る宿の女主人の息子が櫓を漕ぐ小舟に乗せられ川を進んでいく。まもなく霧が濃くなり、名状しがたい恐怖を覚えた主人公は「もう帰りましょう」と言い、なおも櫓を漕ぎ続け霧の中でその姿が朦朧としている息子の名を叫ぶと、黒々とした影になった一羽の鳥が不気味な鳴き声を上げて飛び立つ。ここで主人公は目を覚まし、小舟での顛末は彼の夢だったことが明らかになるが、高熱に浮かされてこの悪夢は一種の臨死体験のような気配を漂わせる。またつげの最後の作品となる「別離」(1987)でも、自殺をするために大量の睡眠薬を飲んだ主人公の意識が混濁していくと、彼の目の前の後景が濃い霞に包まれていく。

そして36ページ目は、丸々1ページを使った大ゴマで、枯田の中に倒れているのと同じ構図で倒れ伏す井月の姿が描かれている。しかしここでは、あたり一面濃い霞に包まれ、また背景には井月が馴染んだであろう伊那のそれを思わせる山並がそびえている。この山々の懷に抱かれるようにして、井月は“蒸発者”として、“無能の人”としての生涯を閉じたということであろうか。

3. 社会的自己滅却としての“蒸発”

ここまで見てきたように、先行作品においてマイナー・キャラクターに過ぎなかった山井が蒸発者の気配を濃厚に漂わせながら前景に躍り出て、タイトルに示されるように蒸発を物語の主旋律として設定し、その後彼の仲介によって物語は蒸発者の井月へとリレーされる。終始脇に退いた観のある助川も、山井に言わせれば「蒸発しているようなもの」なのである。かように3人の男たちは、蒸発という共通項で括られる。ところでつげのエッセイや紀行やインタビューには、蒸発や無能の人について語っている箇所がある。ここでそれらを見ていくことにする。「蒸発旅日記」という“紀行”では、つげ自身の蒸発の顛末が語られる。ここには、蒸発前のことや何が自分を蒸発に駆り立てたかということについては書かれていない。そういえば、「蒸発」においても同様である。山井に関しても井月に関しても、描かれているのは“蒸発後”のこのみである。

さて、つげ自身の蒸発だが、既述のように31歳だった1968年に九州を行き先としてそれを決行している。九州を選んだのは小倉に「結婚相手の女性がいたからだった」が、実は「この女性と一面識もなかった」のであり、「二、三度手紙のやりとりをただけ」だった（「蒸発旅日記」11）。また、九州に向かう列車の中で、「大阪で女工をしていて熊本に帰るのだと云う」若い女性と言葉を交わし、「熊本もいいな」と思い、「この女性に付いて行って彼女と結婚しようかと考えた。相手は誰だっていいのだ」と書いている（「蒸発旅日記」15）。さらに、小倉に着いて「結婚相手」の女性に会ったあとも、ひとりで湯の平温泉を訪れ、そこでストリップを見物し、終了後に踊り子とマネージャーと一緒にバナナを食べた。野球の話などをするうちに、「『この人たちにこのまま付いて行きドサ回りでもして暮らそうか』とも思った」（「蒸発旅日記」24）。あえて言うなら極めていい加減で行き当たりばったりであり、特定の相手と持続的、安定的関係を築こうとする意思や堅実な生活設計、未来への展望といったものが全く欠如していて、ただあてどなく浮遊しているだけのように見える。

“蒸発後”の有り様は、ある意味で“裏返された蒸発前”なのかもしれない。つまりそれは反転図形のように、当人が蒸発前に何にかからめ捕られ、何から逃走しようとしたのかを映し出すものなのである。井月の伊那谷での生き方も、代々引き継がれてきた家や禄を存続させるという武士に課せられた宿命や武士としての体面に対するアンチテーゼであっただろう。つげが“蒸発後”にのみ焦点を当てるのは、それが自ずから“蒸発前”をほんやりと浮かび上がらせる、言わば“前”の陰画のようなものだからではあるまいか。

また、つげはあるインタビューの中で自身の蒸発を、「関係としての自分から抜け出た」と表現している（「つげ義春インタビュー」25）。九州では地元の間人を装ったのだが、その理由を次のように語っている。「何故そうしたかという、ぼくは東京を出た時に一度死んでいるからなんです。ぼくというこの主体、心ですね。生まれ育った東京での関係で形成されている

この自分。その関係をすべて切ったということは、肉体は生きていても死んだのと同じなんですね」（「つげ義春インタビュー」25）。社会学者の見田宗介は、「人間」とは関係である、と述べているが（3）、つげも関係こそが人間であることの要件だと考えているようだ。自己は関係によって形成されているものであり、家族、地域社会、職業・職場集団といった関係のネットワークから離脱することは、肉体は生きていても社会的には死んだ状態、まさに山井の言う「いながらにしていない」、「あつてない」状態になるのだ。言わば蒸発は、象徴的な社会的死、社会的自己滅却なのである。

一方で、それはひとつの“解放”でもある。既述のように、つげは「ボロ宿考」というエッセイで、貧しげな宿の侘しい部屋で布団にくるまっていると、「自分がいかにも零落して、世の中から見捨てられたような心持ちになり、なんともいえぬ安らぎを覚える」と述べている。「零落して、世の中から見捨てられたような心持ち」とは、蒸発者のそれのようだ。そしてそれにより、「なんともいえぬ安らぎを覚える」というのである。そのエッセイで、つげは次のように続ける。「世の中の関係からはずれるということは、関係としての自分からの解放を意味する」（「ボロ宿考」130）。旅とは自分が帰属している社会や日常的現実から一時的に切り離される体験だが、蒸発はその極致であろう。「世の中の関係からはずれるということ」は、つげにとってまさに蒸発が意味するところだが、それは帰属している社会の様々な紐帯やしがらみからの解放であるだけでなく、それらの関係で形成された自己からの解放でもあるというのである。そのことを表すために、同じエッセイのすぐ後の箇所でも「自己否定」、さらには宗教的ニュアンスを帯びた「自己^{ほうげ}放下」という語句が用いられている（「ボロ宿考」131）。ちなみに前述のインタビューでも、「自己から解放された状態」というのは宗教的境地であろう、と述べている（「つげ義春インタビュー」19）。既述のように、井月には行者や聖人を思わせるような佇まいがある。山井の寝てばかりいることと年寄りや病人のような真似も、単なる怠惰や活力の欠如ではなく、意志的な宗教的苦行のような趣がある。

さらに、蒸発は社会的な死、従来の自己の死であるのみならず、文字通りの死、つまり他界へ赴くことにも関わるものなのではないか。既に言及したように、助川から「おたくの場合はいずれ帰るのでしょ」と問われると、山井は「私はほんの一時的にこっちに この世に来ているだけですから」と答える。山井は伊那から蒸発して今いる所へやって来たようだが、「この世」に来ていること自体が「一時的」、つまり^{かりそめ}仮初のものであり、いずれ帰ることになる、というのである。やはりここで言う「この世」は、「俗世（間）」ではなく「現世」のこのことようだ。つまり、現世から他界に「帰る」ことが山井の最終的なゴールなのである。興味深いことに、つげは井月に関しても、「井月の蒸発は死のための用意だったんじゃないか」と述べている（「乞食論」11）。また井月の晩年の生き方に触れつつ、「乞食こそ死に馴染むひとつの方法」ではないか、つまり守るべき財や地位や名声もなく、何の後顧の憂いも残さなければ、死は恐れるも

のでも思むものでもなくなるのではないか、と語っている（「乞食論」11）。乞食とは死に備える生き方なのである。つげの考える蒸発には二つの位相があるようだ。ひとつは俗世におけるそれ、つまり帰属する社会の関係やしがらみのネットワークから離脱し、無用の存在となること、もうひとつは現世から他界へのそれである。そして後者は究極の蒸発とも言うべきものかもしれない。それは起源、つまり帰るべき所であると同時に終末でもある彼岸へ赴くことなのだ。

かように蒸発とは、社会的紐帯を断ち切り自己を社会的に滅却して“他者”になることだ。かくして山井は、死んだ古本屋の主の表札に横棒一本足して「山井二郎」を名乗り、また実際にはそうではないのに年寄りや病人の真似をする。井月も自分の出自や素性・来歴を明かすこともなく、井月という俳号のみで世を渡る。また蒸発は、傍目には零落や落魄と映るであろうが、実はひとつの解放であり安息をもたらすものである。そして、存在と非存在、生と死の双方に相またがるような両義的な体験であり、その射程は俗世のみならず現世からの離脱にも及ぶものである。このように見てくると、既に述べたように、その多面性や奥行ゆえに、蒸発は“無能の人”が行き着くひとつの“果て”や“極”であるように思える。「蒸発」においては、功利・効用性や生産性とは無縁であるがゆえの“無能の人”のペースとといったものははや描かれない。我々が目にするのは、山井や井月の意志的な、または恬淡・飄々とした“無能・無用”ぶりである。“無能の人”シリーズの掉尾の作において、つげはこの主題の新たな地平へと至ったということであろう。

おわりに

「蒸発」の最後のページはエピローグのようなもので、登場するのは助川で4つのコマから成る。いずれも霞に包まれた河原の店舗とそこで物思いに耽る助川を描いており、3つ目のコマで彼がこのページで唯一の台詞を独白する。「井月も山井も大馬鹿ものだよ……」。助川は自分自身を「大馬鹿もの」に含めてはいない。確かに助川は「役立たず無用の者」ゆえに「蒸発しているようなもの」ではあるものの、山井や井月のように実際に蒸発を執行してはいない。しかしこの他人事のような言い草は、山井を問い質す「どうゆう了見なんです」と同じもののようにも見える。一方で、先の台詞を発するときの助川の顔には、その辛辣な内容とは必ずしも照応しないような微妙な表情が浮かんでいる。そして最後のコマは、「水石フェア」なる看板を掲げた石屋の店舗の中で助川が寝そべっている画だが、彼の姿は黒々とした影になっている。助川の姿の黒べた塗りは、彼が自己省察に沈んでいることを表すもののように思える。山井と井月に密かな憧憬を覚えつつ、妻子を捨てて蒸発する勇気もなく、笑止な看板を掲げて河原で売れそうにもないものを商品として売っている我が身を鬱々と省みているのであろうか。

ところで、つげは「蒸発」掲載号の後書きの冒頭で「いずれ続篇を描く予定」と述べてい

るが（「資料負け」）、それは今のところ実現していない。「蒸発」のあと、つげは『COMIC ぼく』に「海へ」（1987）と「別離」（1987）を発表している（「別離」は前篇と後篇に分けて掲載されている）。この2作は自伝的色合いの強い作品だが、「蒸発」の「続篇」的な性格を帯びたものと見ることはできないだろうか。というのは、これらはそれぞれ密航と自殺（未遂）という、蒸発の変異体^{ヴァリエーション}を扱っているからだ。つげは14歳だった1951年及び15歳になった翌年に、結果的に失敗に終わったものの密航を執行し、そして25歳だった1962年に自殺未遂を起こしている。これらのエピソードと先に挙げた1968年の蒸発を考え合わせると、正津が言うように、蒸発はつげの「生来の宿望」なのではないかとも思えてくる。つげは続篇などと意識することもなく、「蒸発」に続けてこれら2つの“蒸発もの”を描いてしまったのかもしれない。

そして私の知る限りでは、「別離」以降36年経ったが、つげは未だに新作を発表していない。「蒸発」、「海へ」、「別離」の3作を仮に“蒸発連作”と呼ぶなら、この連作がつげの漫画家としてのキャリアの掉尾を飾るものになる可能性もある。蒸発シリーズをもってつげが漫画創作の世界から突然姿を消した、つまり“蒸発”したということになるのだろうかなどと埒も無いことを考えながらこの稿を終えることにする。

注

- 1) ただし「鳥師」も、やや「蒸発」と似たタイプの作品と言えるかもしれない。小鳥店主、暗原と彼が語る“鳥師”が前景化され、助川は脇へ退いている観がある。しかし物語の終わり近くには、助川は鳥師と同じように水門から飛び立とうとするという“劇的な”素振りを見せる（息子の三助が迎えに来たため、拍子抜けの結末となるが）。
- 2) 山井の人物造型には、つげのほとんど唯一の友人であり、多くの旅の同行者でもある相模原の古書店主、立石慎太郎(1937-2004)のキャラクターが少なからず投影されているように思える。「魚石」(1979)という作品に主人公の「二十年来の友人 T 君」という名で登場する立石は、「たまたま落ちていたから、利用させてもらった」という理由で「天井」と書かれた看板を店に掲げ、当初は自宅の一室を店舗とし、そこで雑然と積み重ねられた本の山の間に布団を敷いて寝そべっている。
また山口芳則は、つげと桐生までドライブをしていたら貸本屋があったので立ち寄ったところ、「中から、寝巻き姿の男が出てきて、『ちょっと体をこわして、店は休んでいるのですが…』』と言われたと書いている(198)。この人物からもつげは山井像の着想を得ているのかもしれない。
- 3) 下島の「略伝」と下島・高津の「奇行逸話」については、前出の『漂泊俳人 井月全集』を底本とした復本一郎編『井月句集』(岩波文庫)に収められたものを用いている。

引用文献

- 赤坂憲雄 『異人論序説』 砂子屋書房 1985
- 折口信夫 『折口信夫全集 第一巻 古代研究(国文学篇)』(中公文庫) 中央公論社 1975
- 権藤晋 『「つげ義春特集号」の思い出』1992 同 『「ねじ式」夜話・つげ義春とその周辺』 北冬書房 1992 6-20
- 清水正 『つげ義春を読む』 現代書館 1995
- 下島勲 「略伝」1930 復本一郎編 『井月句集』(岩波文庫) 岩波書店 2012 259-268
- 下島勲・高津才次郎 「奇行逸話」1930 復本一郎編 『井月句集』(岩波文庫) 岩波書店 2012 269-289
- 正津勉 『つげ義春—「ガロ」時代』 作品社 2020
- つげ義春 「秋山村逃亡行」1989 同 『貧困旅行記』 晶文社 1991 169-192
- 「石を売る」『COMIC ばく No. 5』 日本文芸社 1985 11-44
- 「魚石」1979 同 『必殺するめ固め—つげ義春漫画集』 晶文社 1981 63-87
- 「海へ」『COMIC ばく No. 12』 日本文芸社 1987 213-250
- 「枯野の宿」1974 同 『義男の青春』(講談社漫画文庫) 講談社 1976 29-52
- 「ゲンセンカン主人」1968 同 『ねじ式—異色傑作選 1』(小学館文庫) 小学館 1976 137-165
- 「乞食論」『COMIC ばく No. 15』 日本文芸社 1987 3-16
- 「蒸発」『COMIC ばく No. 11』 日本文芸社 1986 23-60
- 「蒸発旅日記」1981 同 『貧困旅行記』 晶文社 1991 11-31
- 「資料負け」『COMIC ばく No. 11』 日本文芸社 1986 256
- 「探石行」『COMIC ばく No. 8』 日本文芸社 1986 45-73
- 「つげ義春インタビュー」 竹中直人編 『「無能の人」のススメ』 青林堂 1991 15-33
- 「峠の犬」1967 同 『ねじ式—異色傑作選 1』(小学館文庫) 小学館 1976 75-86
- 「鳥師」『COMIC ばく No. 7』 日本文芸社 1985 221-256
- 「別離(前篇)」『COMIC ばく No. 13』 日本文芸社 1987 3-27
- 「別離(後篇)」『COMIC ばく No. 14』 日本文芸社 1987 199-219

- . 「ボロ宿考」 同 『貧困旅行記』 晶文社 1991 128-131
---. 「無能の人」『COMIC ばく No. 6』 日本文芸社 1985 215-256
---. 「やなぎ屋主人」1970 同 『紅い花—異色傑作選 2』 (小学館文庫) 小学館 1976 175-214
中村喜和 『聖なるロシアを求めて—旧教徒のユートピア伝説』 平凡社 1990
復本一郎編 『井月句集』 (岩波文庫) 岩波書店 2012
見田宗介 『社会学入門—人間と社会の未来』 (岩波新書) 岩波書店 2006
山折哲雄 『乞食の精神誌』 弘文堂 1987
山口昌男 「アルレッキーノ変幻—道化のアルケオロジー」1973 同 『知の祝祭』 青土社 1977. 7-21
山口芳則 「あの頃の、つけ義春とほく」2017 山田英生編 『つけ義春賛江—偏愛エッセイ・評論集』
双葉社 2023 194-203

Welsford, Enid. *The Fool: His Social and Literary History*. 1935. London: Faber and Faber, 1968.

Willeford, William. *The Fool and His Scepter: A Study in Clowns and Jesters and Their Audience*.
Evanston, IL: Northwestern UP, 1969.

